

新刊紹介

シエリング自由意志論

文學士 西谷 啓 治

岩波書店發行

我々は屢々 *deutscher Idealismus* の重要^にに就いて教へられて来た。しかもこれに屬する巨匠の原著を邦語で讀む機會は殆んど與へられなかつた。しかるに今シエリングの「哲學と宗教」と「人間の自由の本質に關する哲學的研究」とが「自由意志論」なる名の下に西谷氏によつて譯出された。哲學に心ひかるゝ者の多くはこれを喜び受けるであらう。

誰しも知る如くシエリングは同一哲學の組織者である。

最初フイヒテの立場に立つた彼の思想は彼の所謂主觀的觀念論から客觀的觀念論へを移り自然哲學へ到つた。 *natura naturans* としての自然を見る自然哲學は先驗的觀念論と相對立する重要な持つに至つた。今や自然哲學は觀念論より演繹されるべきではなくそれと對立するものである。而してこの對立は *Identitätssystem* に止揚せられ、シエリングの立場は確立するに至つた。

しかるに同一哲學に取つては一切は *absolut* には絶對的同一なるが故に反價值は本來あり得ない。しかも反價值を許し得ざる體系は必然に矛盾に陥る。のみならず同一の自覺としての同一哲學

は同一ならざる多を許すことなくしては成立し得ないのでなからうか。同一の自覺は同一が自己を分化發展せしめる所にあり得る。單なる同一は無自覺のそれである。自覺的同一は非同を一を通じてのみあり得る。従つて同一は自らの内より差別を産み出すものでなければならぬ。單に色々な色の牛を一樣にする暗闇であつてはならない。かくてシエリングは更に深き立場へ進まなければならぬ。而して進んだ。勿論それは同一の立場を去つたのではない。同一の立場の完成の爲めに同一の立場を深めたのであるこのより深き立場はもはや合理的なる *Identitätssystem* ではない。*mystisch* なるそれである。彼の積極哲學の時期はこゝに初まる。この時期に移り行くに重要な役目なしたのは彼の自由^にに就ての思想であつた。

カントは道德の要請として自由を立てた。しかしそれは當爲に従ふ限りの自由であり、理想的自由に過ぎない。寧ろそれは道德律の自律を意味したるが故に個人の自由を離れたものとも解し得る。従つて具體的人の立場より云へば眞に自由を解決したものと云ひ難い。それは *Kausalnomic* を解決する限りに於ける自由の解決にすぎない。その上に *Solusnomic* を解決する自由の解決がなされなければならぬ。シエリングこそは眞にこれを問題とし、その解決に向つた云ふ事が出来る。

即ち彼の人間に於ける善と惡への能力としての自由の演繹は具體的人の自由の一の解決である云ふ事が出来る。元來自由の問題に於ては自由の本質の問題以上に自由の可能と現實との問題

が問題である。自由の本質を如何に考へるにせよ、自由の現實の認識は自由の意識によらなければならぬ。しかも自由の意識は *Insinn* であり得る。従つて批判的には自由の現實は不可知のもの、唯信の對象であるに過ぎない。一度形而上學に立つ時初めてそれは第一原理から演繹する事が出来る。しかるに我々の信は何等かの意味に於て合理化を要求してやまない。この要求がある以上假令形而上學を認めざる批判主義者と雖も形而上學的なる演繹に興味を持たざるを得ないであらう。

この書の初めに譯出された「哲學と宗教」は同一哲學の頂點期に位するもの、従つて後期の思想へ將に移らんとする時にあるものである。譯者も云つて居られる如く同一哲學の思想が要約されており、且自由思想の萌芽を持つものである。

この論文に於て特に我々の注意をひくものは彼が絶對と現實差別界との橋渡しの試みである。彼によれば絶對同一から有限差別界が現はれるのは自由の本質にあるのである。絶對に於ては自由と必然とは一であるが、自由は本質上必然への反對を持つものである。理念は絶對より作り出されたものではあるが、自身絶對であり自由にして必然である。しかしその自由が絶對に對立し絶對から分離する事を可能ならしめる。理念は絶對から分離即ち墮落する事により遂に自己性に到る。この墮落に於て理念に於ける自由と必然とは分離するその限りその自由は無である。無より生産されたものは又無である。従つてこの必然と分離せる理念の自由より生産されたる現實差別界は無にすぎない。假幻の世界に過

ぎない。理念が自己性に立つ限りそれは靈魂である。この靈魂に絶對へ歸り行く可能性と絶對よりの更なる墮落の可能性が與へられて居る。このいづれを實現するかは靈魂そのもの、自由であること、普通の所謂自由の現象が與へられる。

「哲學と宗教」が新しき立場への萌芽を持つとすれば「人間の自由の本質」に於てその萌芽は發育したと云ふ事が出来る。彼はこの著に於て晩年に於ける積極哲學への *Grundlegung* を興へたと云へる。「人間の自由の本質」は恐らく最も深き根底よりの自由の理解である。シェリングの人間の自由は善と惡への能力である。故に惡の可能が説明されなければ自由の完き理解はとげられない従つてこの論文は一面惡の問題を主として居るとも云へる。惡の解決に於ては、普通惡は善の原理から獨立に存する、従つて二元論がとられるか、或は惡を一切誤めざるかの二の解決が考へられる。汎神論は後の解決法と結び付くを常とする。この立場に於ては自體に於ては惡なるものは存しない。惡と見るは我々の誤れる見方に過ぎない。しかしこれは單なる言ひわけに過ぎない。惡は依然として惡である。いかなる牽強附會を以てするも惡の直感は如何にも爲し難い。それは惡そのものも *Ungut* を有するからである。

シェリングは序論に於て同一哲學が必然にそうである汎神論は少しも自由の概念と矛盾せず寧ろ汎神論こそ自由を完全に理解し得る所以を説きたる後、譯者が「惡の一般的始源と發生」なる題目を附せられたる部分に於て積極的なる惡の根元を神そのもの、内

なる *Nein* 單に存在の根底である限りの *Wesen* に認めんとして居る。即ち神そのものに神ならざる要素のふくまれて居る事に胚胎せしめて居る。従つて自由の可能性も神の内にあつたのである。その自由が現實なるには自由を惡の方へ促す根據がなければならぬ。これも亦根底に歸せられる。神の愛が實現する爲には根底の反作用がなければならぬ。これを通してのみ神は愛を従つて自己を顯示する。根底の反作用は精神を愛の意志より引き離さんとするものである。こゝに惡の一般的根據を彼は認める。

次に譯者が「人間に於ける惡の實現」と名付けられたる部分に於てシェリングは如何にして惡が個々の人間に實現されるかの問題に移り、人間の *anfangliche Tat* は實に第一の創造即ち神の愛の活動し初めに與へられる事、神の愛の活動し初めは同時にそれへの反作用の働き初めであるが故に必然に惡への傾向を有する事を論證し、こゝに人間に於ける惡の實現の根元を見て居る。シェリングはこの章に於て自由と必然との結合を計つて居る。實に人間の自由は同時に彼の必然である。第一の創造に初まる *anfangliche Tat* に胚胎する人間自らの行によつて現在なる自己が限定された。現實に於ける行爲は従つて必然ではあるが同時に自由である。次にシェリングは譯者の「神の愛」と名づけたる章に於て辯神論へ入つて居る。こゝに同一哲學の超越、新なる立場への *Grundidee* が特に鮮やかに現はれる。

シェリングは惡延いては自由を最も深き根底より解決した。それは確かに最も深き一の解決である。併し最も深きが故に又最も

個人的なものと云へる。個性の類似によつて最も其鳴を感ずる者もあるであらう。感じない者もあるに違ひない。後者もこの書によつて深き反省に促されるであらう。問題は萬人の興味をひくものである。苟も人生を考へる人は一度はこの問題に觸れざるを得まい。この書によつて確信を得る人は幸福であるが更に疑の内に沈み行く人々も無意義ではないであらう。この意味に於て私は凡ての人にこの書を薦めたい。譯は割合に明晰であると思ふ。譯者のシェリングの思想の紹介も我々を裨益する事甚だ大である。たゞ脱字誤植と思はれる箇所が少なからずある事は遺憾である。

私は私の拙き紹介が原著の眞價を傷つけ譯者の本意に反むきはしなかつたかを慮れる。譯者の許しを乞ひたいと思ふ。(伏見文雄)

哲學者の話

文學士 森川智徳 著

中外出版株式會社發行

著者は西洋哲學を専攻し、殊に古代哲學に堪能であるといひ得る。又京都龍谷大學の教授として、學監として同大學の發展の爲に多年努力を重ねて來られた人である。

著者は最近三年ばかりの間に、龍谷大學論叢、中外日報その他の寄稿された小篇二十篇の中から選んで一冊にまとめられたのが本書である。その中には哲學者の逸話、傳記、思想の側面並に著者の所感等を平易に敘述する外に、女性問題、部落問題或は著者